# 沈丁花の香りが、時



# 沈丁花の香りが包み込む時 (2011.8) 何故?何故、こんなことに.....。 箱の中に横たわった彼の体を花が包んでいく。つい数ヶ月前、二十歳になったばかりなのに。 早すぎる彼の死に、あちらこちらからすすり泣きが聞こえる。彼の両親、妹、親しい友人。.....そして、恋人。

て、恋人。 「託生さん.....」

「し…まおか…さん……」

目を赤くした赤池さんが託生さんを横から支え、彼の棺に花を一輪添えた。

「ギイ.....」

愛しそうにそっと撫でた頬に、ポツリと滴が落ちる。

「ギイ…ギ……ィ……!」

言葉にならない嗚咽を漏らし、託生さんの膝が崩れる。

「葉山…!」

託生さんの肩を抱き、ゆっくりと立ち上がらせた赤池さんは、もう一方の手で義一さんの手を握り、 「この、バカヤロウ!」

涙を零しながら、もう返事を発することのない彼にやり場のない怒りをぶつけた。

義一さん自らがハンドルを握ることは、休暇中によくあることだ。さすがに休みの日まで、ガードに見張られたくないだろう。

だからと言って、まさか交通事故に巻き込まれるとは予想外だった。

しかも、大型トレーラーが起こした玉突き事故。多数の死傷者を出し、その中に帰宅途中の義一さんも含まれていた。

警察からの知らせに目の前が真っ暗になり、しかし秘書という仕事柄のせいか慌しくも冷静に動けたと思う。いや、慌しかったからこそ、この悪夢のような数日を過ごせたのだ。

色とりどりの花に囲まれた彼に最後の別れを告げ、棺の蓋が閉まった。

鎮魂の鐘が響く。皆の涙を覆い隠すような、雨が降っていた。

葬儀が終わり、会長を初め、奥様、絵利子さんをご自宅にお送りした私に、執事が深刻な表情で話しかけてきた。手渡されたその小さな箱を開け......。

「ギイ.....」

こんなときに……いや、こんなときだからこそ託生さんの支えになるかもと、慌ててケネディ国際空港へ車を走らせた。

「託生さん!」

搭乗口に向かう託生さんと赤池さんの背中を見つけ呼びかける。

「島岡さん.....」

「先ほど、店の者が届けにきました」

あの日、義一さんが車を運転して注文した品。小さなビロードの箱には、銀色の指輪が二つ並んで 鎮座していた。

両手で受け取ったビロードの箱を託生さんが大切そうに開け、中から一つの指輪を指先で摘み目の前に掲げた。

[Love Eternal].....]

そして、目を細め指輪の刻印を呟く。

「ぼくの二十歳の誕生日は、絶対に空けておけよって言ったんです。約束だぞ?って。.....言った本人が約束を破るなんて.....」

そのときの事を思いだしたのかクスリとロ元だけで笑い、頬を一筋の涙が伝う。そのまま指輪をそっと左手の薬指にはめ、大切そうに右手で包み込んだ。

『島岡。日本では二十歳になったら、結婚に親の許しがいらないんだ』

昔……まだ義一さんが高校生のときに聞いた言葉。なにかを決意したような、ギイの声がよみがえる。

「託生さん.....」

「島岡さん、今までありがとうございました」

「いえ、なにかありましたら、いつでも言ってください。お力になります」

私の言葉に「ありがとうございます」と頭を下げ、赤池さんと搭乗口の向こうへと消えた。

足取り重く駐車場に戻り、ぼんやりと大きな音を立てて飛び立った飛行機を眺めていたら涙が溢れてきた。

「早すぎますよ、ギイ。最愛の恋人を置いていくなんて、貴方らしくない」

人使いの荒い、それでいて側にいるだけでワクワクするびっくり箱のような人間だった。誰よりも輝き、 一瞬の矢のように駆け抜けていった彼の短すぎる人生。あのような人間に会うことは、もう一生ないだろう。

義一さんが想いを込めたあの指輪が、託生さんの支えになればいいと思う。 でも、託生さん。貴方はまだ若い。いつかは、新しい幸せを見つけてください。 呟きと飛行機が、うっそうとした雲に溶けた。

\* \* \* \* \* \* \* \* \* \* \*

「三洲先生!長野君の意識が戻りました。すぐに来てください」

休んでいた仮眠室に、看護師の声が響いた。壁にかけてあった白衣を手に取り、薄暗い廊下を歩きながら手早く羽織る。

居眠り運転のトラックに追突され、一家四人中三人が死亡する事故があった。長男の一也だけが助かり……それでも、この三日意識が戻らず生存する可能性は五分五分だったが、意識が戻ったのであれば一安心だ。

「長野君、気分はどうかな?」

ICUに入り声をかけると、ぼうっと視線を彷徨わせていた長野一也が俺に気付き、ほんの少し驚いたように目を見開いた。

<u>[</u>.....]

「え?」

Г......

「無理にしゃべらなくていい。俺が言っていることはわかるかな?」

長野はかすかに頷きつつ、目で俺と看護師の姿を交互に確認し、今の状況を判断しているように見えた。

「ここは病院だ。君は今、怪我をしていて治療中だ」

家族のことを伏せ、現況だけを伝える。彼が話せるようになってから詳しい検査を行い、状況に応じて 伝えることになっていた。

「痛み止めを流しているからね。まだ寝返りができないと思う。看護師がすぐ側についているから、体勢が苦しかったら遠慮せずに言ってくれ」

長野が頷くのを見届けてから、データに目を通し担当の看護師に指示を与える。俺達を目で追っていた長野は、気付けばうとうとともう一度眠りに落ちていた。

それ以後、何事もなく仕事は終わり、朝の引継ぎを済ませて裏口から病院を出た。

春が近いといえども、三月に入ったばかりだ。朝のキンと張り詰めた空気が頬を撫で、ぼうっとしていた頭をすっきりとさせていく。

これから仮眠を取るのに、眠気が飛んでいくのは困ったものだな。

そう思いつつ公園の角を曲がったとき、

「当直お疲れ様っす」

真行寺の元気な声が聞こえてきた。

「なんだ、迎えにきたのか」

「今日は、仕事が休みでしたから」

手こずっていた案件が、やっと片付いたのだろう。お互い忙しく尚且つ時間的にも俺の方が不規則な 仕事をしている生活では、数週間すれ違うことも多々あった。これは、もう長年のことで、今更話題にさ え出ないことだが。

ふいに柔らかな香りが鼻腔をついた。その香りを辿って首を巡らすと、

「沈丁花っすね。ばあちゃんが好きで、よく庭に咲かせてたっす」

俺の視線に気付いた真行寺が、同じように小さな花を見つけ目を細める。

春を呼ぶ花。淡いピンクの小さな花が手毬状に集まり、ほのかな香りを漂わせていた。一つ一つの花は小さいのに、人が振り向くくらいの存在感。

「アラタさん。沈丁花の花言葉知ってますか?」

「いや……」

「こんなに小さくて可愛い花なのに、『不死』『不滅』『永遠』なんてご大層な花言葉がついてるんすよ」 「ふぅん」

不死なんて、ただの人間の願望だ。どれだけ才能や財力があったとしても、誰にでも平等に訪れる 死。

あいつなら、この経済界を変えられるだけの力があっただろうに、あっけなく逝ってしまった。最愛の恋人を置いて。自分が一人逝けば、残された恋人がどうなるかなど、わかっていただろうに。

十六年も前のことなのに、昨日のことのように思い出せる出来事。胸にこみ上げる息苦しさを振り払うように、

「真行寺、俺は疲れてるんだ。さっさと鍵を開けてくれ」

「す.....すんません!」

真行寺に言い放ち、助手席のドアを開けどさりと座り込みシートベルトを締めた。

「アラタさん、少し休んでください。家についたら起こしますから」

そっとかけられた気遣いの言葉に、素直に目を閉じる。エンジンの音が遠くなるのを感じながら、沈丁花の香りが俺の体を包み込んだような気がした。

元の体力が違うのだろう。意識が戻った長野の回復力は目を見張るものがあり、数日後には一般病棟の個室に移すことになった。あとは、怪我の具合と相談し、リハビリを始める時期を決めるだけだ。「ソーシャルワーカーの方から聞いたのですが、長野君、親戚の方がいないそうです」

「そうですか.....」

回診に付き添っていた看護師の言葉に、眉間が寄る。

薄々は感じていたが、やはりそうだったか。

ここに運び込まれ、ニュースでも事故の件が何度も流れていたが、誰一人として親戚は来ていなかった。慰謝料や保険金で当分金には困らないだろうが、この歳で天涯孤独になるのは辛いものがあるな。俺の管轄外だが。

「でも、普通の高校生には見えないんですよね、彼」

「とは?」

「やけに大人びているというか、冷静というか.....」

怪我の痛みが落ち着いた頃、家族の話をしたのだが、すでに覚悟を決めていたのか、取り乱すこともなく淡々と落ち着いた表情で受け止め、

「わかりました。お伝えくださり、ありがとうございました」

深く頭を下げた。

無表情ではない。それどころか、いつも柔和な微笑を浮かべている。しかし、相手に自分を読ませないよう、幾重にも防御しているようにもを見えて、昔の自分を見ているような複雑な気分になった。

そう言えば、あいつも俺と同じだったな。喜怒哀楽を表しているように見えて、実は全てが計算されていた。あいつが本気で顔色を変えるのは、葉山のことだけだった。

同族嫌悪。だからこそ、あいつの無念がわかる。最後の最後まで、考えていたのは葉山のことだっただ

ろうと。

長野の個室のドアをノックし部屋に入ると、小さくバイオリンの音が流れていた。その音源を捜し、テレビに映る人物を確認して声を上げた。

「ほぉ、葉山か……」

「お知り合いですか?」

「あぁ、高校時代の友人だ。忙しいやつだからな、年に一、二度、日本に帰ってきたときに飲みに行く 程度だが」

長野の声に頷き画面に目をやる。

三十を当の昔に回っているのに、童顔のせいか今でも外国に行くと、二十代にしか見てもらえないと 文句を言っていた。オーケストラをバックに従え、引けを取らず堂々と奏でる姿に、華奢な体のどこにあ れだけの力があるのかと、いつも不思議に思う。

個人的に会うときは、相変わらずの天然なのにな。

「体は.....」

「うん?」

「いや、葉山...さん細いから、そんなに忙しかったら体調崩さないのかと思いまして」

「まぁ、大丈夫だろ?昔はぶっ倒れるまでバイオリンを弾いていたが、今はセーブしているはずだ」 答えながらガーゼを捲り傷の具合を確かめる。どこも化膿している箇所はないな。この分だと、軽くリ ハビリを始めてもいいだろう。

されるがままにガーゼ交換を受けていた長野の視線が、画面から離れないのを見て、

「君は葉山のファンなのか?」

と問いかけた。

「えぇ、まあ」

「そうか。今度、葉山に会ったときに言っておくよ。だいぶ良くなったし、そろそろリハビリの時間も入れてい こう。理学療法士と話を詰めておく」

「わかりました」

次の回診に行こうと病室のドアを開け、ふと振り返った目に映ったのは、長野が口唇を噛み拳を握り締めて画面を睨みつけている姿だった。

ファンと言うには、あまりに奇妙な構図。まるで裏切りにでもあったかのような、痛みを写した瞳。

―――――似ている。葉山と心がすれ違ったあいつが時折見せていた瞳に。

釈然としないなにかを感じながら、静かにドアを閉めた。

「未成年のオレが押印しても、後見人が取消権を行使すれば無効だ。さっさとケリをつけたいのだろうが、これ以上無理強いすると脅されていると訴えるぞ」

ドア越しに漏れ聞こえた声に、遠慮なくドアを開ける。

そこには、保険屋と思しき人物が二人、書類と筆記用具.....勝手に用意してきたのか印鑑を持ち、ベッド脇に見下ろすように立っていた。

「後見人が決まるのは、だいぶ先のことでしょう?それまで、お困りになるでしょうし.....」

威圧的な態度に臆せず冷ややかに睨みつけ、かつ正論を言い放つ長野に気押されしつつも、食い 下がる根性は認めるが。

「誰の許可を持って、長野君の病室に入っているのでしょうか?」

「えっ…あの……」

突然の俺の声にばつの悪そうな顔をし、目配せをする。

「長野君の面会には、私の許可が必要です。患者の治療の邪魔をしないでいただきたい」

既に家族が亡くなっていることを伝えてはいるが、その患者によっては容態が落ち着くまで伏せている場合もある。そんなときに保険金の話だなんて、医者の立場でなかったとしても、目を疑う行為だ。

第一に、まだ本人が自由に体を動かせない状態で示談だなんて、侮辱するにも程がある。子供相手だからと、いいように話を進めようとするところが気に入らない。

「未成年後見人が決定するまで、長野君への接触は許可しません。ナースセンターにも話を通しておきますので。ご退出願います。」

目を見合わせこそこそと退室していったやつらを見届け、

「こういうときは、遠慮なくナースコールを鳴らしてもらってかまわないから」

長野に声をかけた。

そのままベッド脇のパイプ椅子に座り、長野に向かい合う。

リハビリテーションセンターから、長野のことを聞いていた。素直にリハビリを受けてはいるものの、本人のやる気が見えないと。

今になって己の現実を認識し自暴自棄になっているのであれば、カウンセリングを受けさせないとと思い、一度長野とじっくり話をしたかった。

「未成年後見人なんだが、親しい知り合いとか頼めないかな?」

「そういう知り合いはいませんから、裁判所が選定した未成年後見人でかまいません。 高校も寮に入ることが可能ですし。 ご心配、ありがとうございます」

「そうか.....」

うろたえることもなく、あっさりと自分の考えを述べる長野に、自暴自棄になっている様子は見えない。 それどころか、ここまで冷静に現況を受け止め、自分自身のこれからについて考えられる人間はなかな かいないだろう。

高校生らしくないどころか、歳を騙しているんじゃないかと思うほどに。

「なにか困ったことがあったら、いつでも言ってくれ。アドバイスくらいはできると思う」

「お気遣い、ありがとうございます」

カウンセラーは俺の分野じゃない。だから、長野の話を聞いてもどうしようもない。しかし、この言いようのない違和感が胸の奥でくすぶり続け、長野の本心を聞いてみたくなる。

お前は、いったい、誰なんだと――――。

\* \* \* \* \* \* \* \* \* \* \*

依頼主との打ち合わせの帰り。

「あぁ、三洲の病院が近所だったな」

目に入った総合病院の名前に、それを思い出した。

今日はこのまま直帰しても問題がない。長い間、三洲とも会っていなかったことも相まって、僕は病院の駐車場に車を向けた。

ナースセンターに顔を出し三洲の行方を聞いてみると、まだ一般患者用の診察室にいると言う。

エレベーターで一階まで下り、すでに診察時間が終わった人気の少ない廊下を歩き『三洲 新』のネームプレートが差し込まれたドアを軽くノックする。返事を待って、スライド式のドアを開けた。

[ኒ]

「赤池じゃないか」

くるりと椅子を回し、白衣を着た三洲が振り返る。

「近くまで来たから、三洲が暇ならお茶でもと思ってな」

「暇じゃないが、付き合ってやってもいいぞ」

相変わらずの毒舌に笑い「光栄です」と、三洲を促した。

他愛無い近況報告をしながら、ロビー横の喫茶室に向かっていた僕達の前に、小ぶりの中庭が現れる。数個置かれたベンチには、入院患者と思しき人達が数人座っていた。春の訪れには早いが、陽射しは暖かそうだ。

そのベンチの向こう、同じく中庭に面した廊下を歩いている男に足が止まる。

まさか.....。

「どうした、赤池?」

「あいつ。あの紺のガウンを羽織った.....」

「……あぁ、長野一也か」

「長野?」
「先日のトラック追突事故の……生き残りの長男だ」
あぁ、あの事故の。確かニュースで十六歳だと言っていた。僕達に気付かず歩行器に肘を乗せ、ゆっくりと廊下を歩いていく。
あいつは、死んだんだ。十六年も前に。
なのに、なんだ、この違和感は。僕の本能が、なにかが違うと叫んでいた。
「赤池?!」
「君、ちょっと待ってくれ」

三洲の声を背中に受けながら中庭を横切り、ゆっくりと廊下を歩く長野の肩を掴み引き止める。振り返った長野の瞳をじっと見詰め、自分のとんでもない発想を打ち消そうとした。しかし、その瞳の奥に追い討ちをかけられたような気分になる。

こんなことが現実にあるのか?

僕の無遠慮な視線に、長野は不快感を表し、

「なんでしょうか?」

冷たく突き放すように言い放った。

「少し話がしたいんだ、君と」

「見ず知らずの人間と話をする義理はないので」

「長野君、すまないな。昔、君によく似た友人がいたので、懐かしくなって呼び止めてしまったようだ」 言い捨てて、その場を去ろうとした長野を、柔和な笑みを浮かべ三洲が引き止めた。僕がどうして話 しかけたのか、わかった上での行動か?

振り返ると三洲が目配せをし、言葉を続ける。

「こいつも、俺の高校時代の友人でね。……葉山の一番親しい友人でもあるんだ」

葉山の名前を出したとたん、一瞬長野の顔が痛ましそうに歪んだような気がした。同時に僕の疑問を的確に捕らえた三洲を認識し、この場の主導権を三洲に渡す。

僕が感じるまでもなかったということだ。三洲も長野に同じ疑問を持っていた。

「葉山のファンなんだろ?こいつは葉山の七癖まで知ってるぞ。それと......葉山が第一ボタンまで留めている理由を知る、数少ない人間の一人だ」

「第一ボタン……?」

「葉山はプライベートでも、必ず第一ボタンまできっちりボタンを留めているんだ。理由知りたくないかい?」

「三洲、あれは……」

口を挟んだ僕に「黙ってろ」と視線を寄越し、もう一度挑発するように長野を眺め、

「葉山のファンなら、そういうちょっとしたところとか気になるんじゃないのかい?当分喫茶室にいるから、マニアックな話が聞きたくなったら来てくれ」

そう言い置いて三洲は僕を促した。喫茶室に入るまで、長野の視線が背中に突き刺さるのを、僕は 感じていた。

置かれた冷水を一気に飲み、大きく息を吐く。動揺に手が小刻みに震えている。こんな夢物語のようなことに遭遇するなんて思いもしなかった。

「三洲.....あいつは......」

「……生まれ変わりって、あると思うか?」

「そんなおとぎ話のようなことありえない。でも、あいつは、ギイだ。どこがと言われても困るが。直感であいつはギイだと感じるんだ」

ー目見たとき、ギイだと思った。十六年前に死んだのだと認識しているにも関わらず、ギイなんだと僕 の本能が叫んだ。

「三洲も、なにか感じていたのか?」

そうでなければ、あそこで援護射撃はないだろう。

「俺は、崎と特別親しかったわけではないから、感覚的なものはわからない。ただ、行動が重なるときが何度かあった。でも、まさか、こんな非現実なことがあるとは信じられなくてな」

お互い根っからの現実主義。特に医療に携わっている三洲は、自分の目で見た物だけが真実なのだ。科学的事実がなければ信用しない。そのポリシーを覆うような、根拠もない事柄に三洲も戸惑っていたのか。

「あいつが崎なら、さきほどの理由を知りたいと思うだろう......ほら」

三洲の声に振り向くと、硝子のドアの向こうに長野一也の姿が見えた。

無言のまま上った屋上には、冷たい風が吹いていた。人影のない場所まで移動し、三洲が足を止める。

「第一ボタンの理由が知りたいか?」

「ぜひ.....」

仕事用の笑みを消し親しい友人だけにしか見せない素の表情で三洲が問いかけ、長野はそれに疑問を持つこともなく静かに頷いた。

「赤池。当事者から話してくれないか?」

長野の返事に軽く頷き、居合わせたただ一人の人間である僕に後を任せ、三洲はすぐ側の壁にもたれかかる。なにかがあればすぐに動ける位置だ。

思い出すことも口に出すこともためらわれる、あの出来事。僕の脳裏にあの情景が浮かび、一瞬奥歯を噛み締めてから、気持ちを静めるために大きな息を吐いた。

「葉山は死んだ恋人の後を追おうとして、大量の薬を飲み首を切った。十六年前のことだ」 そして、一息に事実を伝える。

僕の言葉に長野の顔色が紙のように白くなった。

「手を傷をつけるとその恋人が怒るからって、ためらい傷一つなく、ここをすっぱりとね」

自分の首の右側を手で真横に引き、状況を説明する。いや、本当はこんなことまで言う必要はない。けれども、こいつには言わなければならないのだと本能が言っていた。

アメリカから帰り、葉山をマンションに送り届けたまではよかった。

『大丈夫だから』

微笑みながら手を振った葉山に、何故疑問を感じなかったのか。何故あんな笑みが浮かべられたのか、どうしてその場で追求しなかったのか。

電車に揺られながら突如胸騒ぎを覚えた僕は、途中下車をして元来た道を戻り、インターフォンを連打した。返事のない扉。回したドアノブがすっと開き、独特の匂いが鼻をつく。

「葉山!!」

玄関を開け目に飛び込んできたのは、血の海の中に横たわった葉山の姿だった。意識はすでになく、側には大量の睡眠薬の包み紙と首を切った包丁が転がっていた。

すぐに救急車を呼び一命を取り留めたものの、ぼんやりと目蓋を開けた葉山の目には絶望が浮かんでいた。

『ギイを失っても、生きていける?』

あの時、葉山は僕にそう問いかけた。裏を返せば、葉山はギイを失ったら生きていけないことを意味する。

ギイのいない世界が葉山に絶望を与えるのだとしても、それでも、僕はもう見たくはなかった。

「頼む!僕の大切な友人を、これ以上奪わないでくれ!」

「……赤池君」

「ギイの分まで生きろよ!生きて生きて、生ききって、向こうに行ったときギイに文句を言えよ。早すぎるんだよ、バカって!」

「赤池君……ごめん……ごめん……ね」

相棒をなくした僕。恋人をなくした葉山。二人して抱き合い声が枯れるまで泣いた。

長野は右手で口を覆い、崩れるようにその場に膝をついた。支えにしていた歩行器が、反動で横に

ただの葉山のファンならば、ここまで動揺することは考えられない。 「ど.....うして........」 「微笑んでさえいたよ。あの血の海の中で」 「どうして.....どうしてだよ、章三?!」 同じく膝をついた僕の腕を掴み、長野が.....いや、ギイがしぼりだすように叫んだ。そのままずるずると 腕を落とし、コンクリートの床に頭をつけて嗚咽を漏らす。 「託生……託生………!」 「ギイなんだろ?全てを思い出しているんだろ? 」 しばらくしてこっくりと頷いたギイの頭を片手でぐいと抱え込み、 「この、バカヤロウ!」 十六年前、冷たくなったこいつに投げつけた言葉を、今度こそ言わせてもらった。 勝手に逝きやがって。どれだけ......あれからどんな思いで今まで生きてきたか......。 三洲を見上げると、 「輪廻転生って、本当にあったんだな」 赤くなった目を隠しもせず、皮肉っぽく笑った。 三洲が看護師に呼び出され、ベンチに二人で座り直し温くなった缶コーヒーのプルトップを開けた。 「飲めよ」 「あぁ」 ぼんやりと缶コーヒーを見ていたギイに勧め、僕もぐいっとコーヒーを飲んだ。半分ほど飲んで、やっと一 息つけたようだ。 「昔からギイの記憶を持っていたのか?いつ、気付いたんだ?」 僕の疑問に、ギイは諦めたように口を開いた。 「事故にあって目が覚めたときだ。だから、すごく混乱した」 「そりゃ、混乱するだろうさ」 「いや、一気に崎義一の記憶が戻ってきたものだから……あの事故の後だと思ったんだよ」 あの事故.....。ギイが死んだ思い出したくない過去。 「それにしては、三洲が白衣着て目の前にいるし、それなりに歳も取ってるし。長野と呼びかけられて、 自分が誰なのかわからなくなった」 それは、確かにパニックになりそうだ。 あの事故当時、ギイは二十歳。そして今は十六年後の世界。こいつでなければ、なかなか順応でき なさそうだ。 「何故、前世の記憶があることを三洲に言わなかったんだ?」 三洲は、ずっとお前を疑っていたのに。 「普通、信じられるかよ、こんな話?……それに、なんのために、前世の記憶なんかよみがえったんだろ うって考えてたから」 「え?」 「今は、幸せなのか?結婚しているんだろ?」 ギイが苦しそうに言う。 「誰が?」 「......託生が」 「葉山は結婚なんてしてないぞ」 僕の言葉に、信じられないものを見るように目を見開いて驚くギイに、僕こそ驚いた。いったい、どうし たらそういう勘違いができるんだ。 「託生の薬指に指輪が……」 「あれは、お前が買った指輪だろうが。日本に帰るときに島岡さんが空港まで届けてくれたんだ。それ以

転がっていく。

### 来、葉山はあの指輪を外してはいない」 「あのときの.....」 思いだしたのか、ギイがポッツと味いたの

思いだしたのか、ギイがポツリと呟いたのを見て、はたと気付く。

「お前、まさか、葉山が結婚していると思って、僕達にも悟られないようにしていたのか?」

バツが悪そうな顔をして缶コーヒーに口をつけるギイに、大きな溜息を吐いた。

「バカか.....」

「章三」

頬を赤くして睨むギイに、笑いがこみ上げてきた。

葉山が絡むと突っ走るその癖、いいかげん直したほうがいいんじゃないか?生まれ変わっても、こんなに葉山バカでどうするんだよ?

腹を抱えて爆笑する僕に釣られ、ギイも笑う。

こんなに笑ったのは、あの日以来初めてだ。あぁ、きっと太陽が涙で滲むのは、笑いすぎたせいだ。

「葉山に会うよな?」

「あぁ」

清清しい見慣れた表情で答えたギイの目も赤い。

「章三、気付いてくれてありがとう」

照れ隠しに、ギイの頭を一発殴っておいた。

\* \* \* \* \* \* \* \* \* \* \*

目が覚めたとき、まず「ここはどこなんだ?」と思った。近くにいた看護師の姿を見て、あぁ、事故にあったんだと思い出した。もちろん、オレが......崎義一が死んだらしい方の事故だ。

しかし、入ってきた三洲の顔を見て驚いた。

三洲は、まだ医学生のはず。それなのに、なぜ白衣を着て診察をしているのか。しかも、三洲本人ではあるけれど歳が違う。

まるで自分が浦島太郎になったような気分を味わっていると、

「長野君、気分はどうかな?」

三洲らしくない口調で、しかも長野と呼びかけた。

長野.....?

混乱しているのに気付かず声が出ないだけだと判断した三洲は、オレにロ早に説明し看護師に指示を出し始めた。

どういうことなんだ?オレは、いったい誰なんだ......?

考えたくとも、まだ薬が効いているのか朦朧と思考力が低下し、オレはそのまま眠りに落ちた。

次に目覚めたときは、同じく計器に囲まれてはいたが、意識はすっきりしていた。そして、潔く気付く。「オレ」は一度死んでいるのだと。今まで長野一也として生まれ育ち、事故がきっかけなのかはわからないが前世の記憶がよみがえった。

最初に思ったのは、託生のことだった。

今では世界的なバイオリニストとして活躍しているのを知っていたが、オレが死んだとき泣かせてしまったのだろうなと。

何度も三洲に話をしようと思った。しかし、こんな不可思議な話を信用してもらえるのか定かではない し、精神的に問題ありと思われるのも心外だ。

とりあえずは体を治し自分の生活を確立して、それから託生に会いにいこうと思っていた矢先、音楽番組で託生の左薬指に指輪を見つけた。

オレが死んでから十六年も経っている。新しい恋を育み結婚していたとしても、仕方のないことだ。 しかし、託生の幸せな姿を見るために、前世の記憶を思いだしたのかと愕然となり、全てが投げやり になった。

これが、託生を残して逝った罰なのかと。

章三にバレ、全て杞憂であったのだと知らされたオレは、投げやりになっていたリハビリを懸命に受け、

普通に歩けるまでに回復した。
 余談だが、数日後、見舞いに来た章三がオレのすっかり良くなった姿を見て、「さすが、最強のビタミン剤」
 と、大爆笑していたことを付け足しておく。

「殴られるだろうな」
「ツラの皮厚くして、覚悟しておくんだな」
 章三の軽口に笑いつつ、オレは緊張していた。

ヨーロッパツアーから帰国する託生を迎えに、成田に向かっている車中。

三洲と章三は、オレに気付いてくれた。しかし、託生はわかってくれるだろうかと。今でも、オレを愛してくれていると聞いたが、それを疑ってはいないけれど、やはり不安だった。

人並みに押されるように、託生がマネージャーらしき人物と共に到着ロビーに姿を現した。

「葉山、お帰り。ツアー、お疲れさん」

「赤池君?三洲君?」

懐かしい託生の声。とたん、オレの体が熱くなり鼓動が早くなる。託生の息遣いさえこぼさぬように、 耳を澄ませた。

「わざわざ来てくれたの?」

「まあな」

「それじゃ、託生さん。私はここで.....」

「はい。お疲れ様でした」

マネージャーが消えるのを待って、章三が託生に向き直る。

「……葉山に会ってもらいたい人がいるんだ」

「ぼくに?」

「おい、出てこいよ」

三洲の声に、オレは隠れていた柱の陰から一歩前に出た。

託生の顔が驚きの表情に変わり、右手からバイオリンケースが滑り落ちる。予想していたのか、咄嗟 にケースを三洲が受け止めた。

自分が大切なバイオリンケースを落としたことにも気付かず、オレを凝視したまま「ギイ.....」と託生の口が形作る。

あぁ......

あの頃と変わっているはずなのに、それでも一目でわかってくれる。オレは、このために前世の記憶がよみがえったのだと、今はっきり思い知った。

「ギ.....イ.....?そんな.....どうして......」

「戻ってきた」

託生に会うために。

口元を手で覆い、理解できない出来事に頭を振りながらぽろぽろと涙を零す。

「託生?」

「ギイ…!」

両手を広げて促し、胸に飛び込んできた託生を受け止め、強く抱きしめる。あの頃と変わらない甘い 匂い、華奢な体。背中に回った託生の腕の力に、やっと緊張がとけた。

「ギイ.....ギイ.....」

「一人にしてごめんな。.....愛してるよ」

託生の肩越しに、章三と三洲の半分呆れたような、しかしオレ達を見守るような暖かい眼差しが見え た。

泣きじゃくる託生を抱えるようにして車に乗せたものの、胸を叩かれながら散々託生に文句を言わ

「あぁ」 時差ぼけも相まって、泣き疲れて眠った託生の肩を抱き寄せ髪に口唇を寄せた。 「これで三十代なんだよなぁ」 バックミラー越しに合った章三の目に、 「可愛いだろ?」 ニヤリと笑う。 とたん、わざとらしい溜息を吐いて、 「.....お前の目、老眼入ってるんじゃないか?」 「まだ十六だ」 「いやいや、見せかけかもしれん」 軽口を叩く。 託生のマンションまで車を走らせ、しかし、ぐっすり眠っている託生を起こすのは忍びなく、ポケットから 取り出した鍵を使って中に入り、ベッドに託生を寝かせた。 「三十分もすれば起きてくるだろ」 「そうだな」 頷いてリビングに移動する。 「一人暮らしにしては、広そうなマンションだな」 「世界的なバイオリニストだからな。防音室もあるし。一部屋くらい余っているだろうから、転がり込むこと は可能だぞ?」 「当然だ」 三洲の説明に、すっかり転がり込む算段をする。託生の泣き顔を見て、もう二度と離れないと決めた んだ。さすがに託生も追い出しはしないだろう。 「なにもないな。なにか買ってくれば良かった」 ダイニングから聞こえてきた声に振り向くと、章三が冷蔵庫を開けながら思案していた。相変わらず主 婦魂が抜けていないのかと笑ってしまう。 そうだ。託生のことばかりで、こいつらのことを何も聞いていなかった。落ち着いたら、ゆっくり聞かせても らおう。 ドタン!バタン! 「あー、起きたな」 章三が入れてくれたコーヒーを飲んでいると、廊下からバタバタと足音が近づき、リビングのドアが勢い よく開いた。 「ギイ!」 「どうした、託生?」 「.....夢かと思った」 立ち上がったオレとは反対に、へなへなとそこに座り込んだ託生に慌てて駆け寄る。 「オレなら、ここにいるから」 「うん」 驚かせたことに対する意趣返しのつもりか、腹立ち紛れにオレの胸に頭をぐりぐりと押し付けるさまに 頬が緩んでくる。 どうして、こう、こいつはこんなに可愛いんだ。 「添い寝してやればよかったな」 「な.....」 咄嗟に上げた頬にキスをして、ぎゅっと抱きしめた。とたん、ぽてっと体の力を抜いて肩に頬を預けてく る。 しばし託生の感触を楽しんでいると、 「おい、そこのバカップル。コーヒー入れなおしたぞ」

れ、また泣かれ......。

「寝たか?」

「あああ……赤池君!」
オレの影に隠れて見えなかったのか、オレしか見ていなかったのか、章三の声に飛び跳ねるように託生が離れ尻餅をついた。

「でも、いったい、なにがどうなって、どうなってるの?」
ソファに座ったとたん、託生が頭にはてなマークを盛大に飛ばし小首を傾げた。
それはそうだ。託生には、まだなにも説明していないからな。突然現れたオレに混乱するのは当たり前だ。
手短にトラック事故からの経緯を話した後、託生が顔を曇らせた。
「じゃ、ギイ。一人なの?」
ぎゅっとオレの手を握り、辛そうにオレを見上げる。
「葉山が未成年後見人になればいいんだ」

「あ、そうか」

三洲の言葉に、託生が納得したように頷いたのだが。

天涯孤独の今のオレの立場と、これから先託生と一緒にいることを考えると、託生がオレの後見人になるのが、一番の得策だとはわかってはいるが.....。

微妙な顔をしたオレを、託生が覗き込んだ。

「ギイ?」

「託生がオレの後見入ってのは、かなり複雑なんだが」

まだ章三や三洲の方が……と言えば、託生が拗ねるのは目に見えている。だが、やはり、恋人が未成年後見人というのは、複雑だ。

「仕方ないだろ?ギイは未成年で、ぼくは、一応、世間に認められている大人なんだから」

「一応とつけるところが、葉山だな」

三洲の言葉に、託生が頬を膨らませる。

あれから十六年も経っているのに変わらぬ仕草に吹き出すと、「ギイ」これまた見慣れた表情でオレを睨み、笑いが止まらなくなる。後ろ向きの思考ばかりしていた反動か、今日のオレはおかしいらしい。

「とりあえず、今日は外出許可を出しているから。明日、病院に戻ってくれ」

「わかった」

「ギイ、まだ怪我が.....」

「いや、もう、ほとんど治ってるよ」

正式な身元引受人が決まらないと、退院したあと面倒なことが起こるかもしれないので、退院手続きを取っていないだけだ。本来なら通院だけで事足りる。

「弁護士を紹介してやるよ。手続きはそいつに全部丸投げしたらいい」

そう言い置き、章三と三洲が席を立つ。

玄関まで見送りにいくと、ドアを開けながら三洲が振り返った。

「葉山、崎を襲うなよ。淫行だぞ」

「三洲君!!!」

ニヤリと笑い素早くドアの向こうへ消え、二人きりになる。当然のように託生を抱き寄せ口唇を重ねた。

「託生……」

۲*h*......

ひとしきりのキスをして離すと、託生がクスリと笑った。

「.....なんだよ」

「身長が同じくらいだなと思って」

「これから伸びる予定なんだから、気にするな」

ウインクを一つつけて託生を抱き上げ、さっき運んだ寝室に足を向けた。そしてベッドに下ろして慌てて起き上がりかけた託生の腕と足に体重をかけ、脱出を阻む。

```
「あ…あの、ギイ」
「うん?」
「み…三洲君が言ってただろ?あの……」
「あぁ。託生がオレを襲ったらダメなんだよな。オレが託生を襲うんだから関係ない」
「そういう問題じゃ.....」
「そういう問題だって」
「それに……」
「それに?」
「ぼく、ギイより二十歳も年上なんだけど……」
「託生は、いくつになっても可愛い」
「.....っ!」
顔を赤くして押し黙った託生の口唇にそっと重ねた。硬く緊張している託生を怖がらせないように、何
度も重ねて緊張を解していく。
 口唇を頬に滑らせながらシャツのボタンに手をかけ、襟元を広げた。シャツの襟に隠れる箇所に残る
大きな傷跡。
「あ.....」
咄嗟に傷跡を隠した託生の左手を外し、そこに口唇を落とす。
「ごめん.....ごめんな、託生」
こんなこと、させてしまって。自分で命を絶つような、辛い目にあわせてしまって。もしも、託生が死んで
いたら、すぐに後を追っていただろう。
生きててくれて、ありがとう。
「.....ギイともう一度会えてよかった」
「あぁ。オレも、もう一度託生に会いたかった」
意識がなくなる瞬間まで、ずっと託生のことを想っていた。
「託生、愛してる」
「うん、ぼくも.....愛してる」
時空を越え、巡りあえた奇跡。
どうか......どうか今度こそ、二人で生きていきたい。
 数日後。言葉通り、三洲が病室に弁護士を連れてきた。
「真行寺?」
「へ?……ギイ……せんぱ……い?」
何も知らされず、未成年後見人の選任申し立てと相続手続き、ついでにと保険会社や加害者の
会社相手の損害賠償請求の窓口など、それこそ全てを丸投げさせるつもりの三洲に連れてこられ、し
かし、オレの顔を見たとたんポカンと口を開け、その後真行寺は盛大に泣いた。
そのうち見舞いに来ていた託生も釣られてぽろぽろと泣き出し、この湿っぽい空気をどうしようかと思
案するも、
「お前は、仕事一つスムーズに進められないのか?」
 三洲の一蹴で事態はあっけなく収拾した。
真行寺は三洲の鉄拳に頭をさすりながらも全ての手続きを迅速かつ完璧にやってくれ、無事託生が
未成年後見人となり、今日は退院日。
「着替え買って帰る?それとも取りに行く?」
迎えに来た託生に聞かれ、一度も家に帰っていなかったこともあり、そのまま長野の家に寄ることにし
たのだが.....。
「……大丈夫か?」
「もう、失礼だな。免許暦は長いんだよ。それに、カーナビもついてるし」
 ......託生、免許暦じゃなくて運転暦だ。それとも.....いや、深くは考えまい。いざとなればオレも
```

運転できるし。無免許だが。

多少不安はあったものの、無事、長野の家にたどり着けた。

鍵を差しこみ玄関のドアを開けると、閉め切っていたためか、どんよりとした篭った空気が漂っている。

玄関横のリビングに入ると、時計の秒針がやけに大きく響き、シーンとした空間が広がっていた。

「親父がいて、お袋がいて、小生意気な妹がいて.....」

耳の奥に、笑い声が聞こえる。部屋の中が暖かい色に染まってくる。

そこにお袋が立ち、妹が手伝っているのか邪魔しているのか、お袋に料理を習っていた。親父がその 椅子に座り、オレ相手に晩酌しようとしてお袋に怒鳴られていたっけ。

視界が涙でぼやける。

「ギイ.....」

「まだ十二歳だったんだ.....」

託生がオレの頭を抱きしめ、優しく髪を梳いてくれた。

その守られているような感覚に、オレは自分が親を亡くした子供だったことを思い出した。この世に生を受け、親の加護の中、今までぬくぬくと生きてこれたのは、家族があってこそだ。

託生の肩に額を押し付け嗚咽を堪える。

事故にあい意識不明の間に葬儀が行われ、気付けばもう全てが終わっていた。家族を失った現実が、やっとオレの中に流れ込んできた。

オレは今、崎義一の記憶があるけれど、十六年もの間、長野一也で生きてきたのは紛れもない事実。ここには、長野一也の家族の記憶が残っている。

「すまない」

「ううん」

二階にある自分の部屋に入り、とりあえずの着替えを鞄に詰め、部屋をぐるりと見回した。

「荷物を運んだ後は、この家を処分するよ」

「え、どうして?残しておいてもいいじゃないか。家族の思い出だろ?」

交通事故の生き残り。それだけで興味本位な目を向けられる。現に、さっき車から降りたオレ達を取り囲みたそうな他人の目に反吐が出た。

「ここに思い出があるからいい」

心配そうにオレを見る託生に笑いかけ、自分の胸を指差す。

オレを愛してくれた長野の両親、そして妹。気に病んでいるかもしれないけれど、オレは一人じゃないから。最愛の恋人に、もう一度巡り会えて幸せだから。心配しないでくれ。

「おはよう、託生」

「おはよう、ギ.....」

「ん、どうした?」

「ギイ、学園なんだ...」

久しぶりに腕を通した制服を見て、託生が懐かしそうに目を細めた。祠堂学院と祠堂学園。微妙に デザインが違うが、胸のマークは同じだ。

「院とは、また趣向が違ってて面白いぞ?」

 $\lceil \sqrt{z} \mid$ 

やっと生活が落ち着き、体のほうも通学に支障がなくなった。そろそろ学校に行ってもいい頃だ。二年生に進級してから一度も学校に行ってなかったしな。

ヨーロッパツアーが終わり休息期間なのか、託生の仕事もそれほど忙しくはない。

一緒に朝食を食べ食後のコーヒーを飲んでいると、

「ギイは、将来の進路とか決めてるの?」

「いーや、全然。普通のサラリーマン家庭に育ったからな。普通にサラリーマンでもするよ」

「ふうん」

託生は不思議そうに軽く頷き、

「ね、どのくらいギイなの?」 よくわからない質問をしてきた。ま、言葉が足りないのは昔からだ。 「どのくらいって?」 「ギイの人生、どのくらい覚えてるの?」 「……多少な。でも、託生のことは、全部覚えてるぞ」 ウインクを一つしてにっこり笑ってやると、 「ぼく洗い物してくるよ」 赤くなった顔を隠すように託生が逃げ出した。 .....本当は、全て覚えている。 長野一也の記憶が上書きされたわけではなく、人間二人分の記憶がオレの中にあった。 元々、崎義一の記憶力は優秀だったんだ。オレが死んだあの事故の直前まで鮮明に思い出せる。 だから学校の授業なんて、本当は退屈なだけだった。記憶だけじゃなく知識さえも全て戻っているの だから。 それでも、今のオレはただの高校生。何物にも邪魔されない託生との生活を楽しむため、精一杯今 の状況に甘えようと思っていた。 一学期の期末テストが終わり、あとは終業式を迎えるのみ。打ち合わせのため事務所に行っていた 託生が、客を連れて帰ってきた。 「義一さん.....」 「島岡……?」 「もう一度、ギイに会えるとは思いませんでした」 白髪としわが増え、それでも紳士的な態度は昔のまま目を赤く潤ませ、島岡がオレの手を握る。 「託生?!」 崎の家に携わる者には連絡するなと言ったはずなのに、何故? 「島岡さん、中でゆっくりお話されてください。ギイも....... 託生は島岡にソファを勧め、オレ達二人を残してダイニングに消えた。 「託生が連絡したのか?」 「はい。『ギイが生まれ変わって、今、側にいる』と。意味がわかりませんでした。託生さんには申し訳な いのですが、どうかされてしまったのかとも思いました。それで心配になり、赤池さんに連絡を取ったんで す। 「......それで?」 「詳細を全て教えていただきました。にわかには信じられず、実は一週間ほど前に日本に来たんです。 一目で本物だとわかりました」 確かに島岡ならオレを見ただけで、わかるだろうな。 ただ、オレに会いに来たのなら、そのときに声をかければよかっただけの話。一週間経った今、こうして 現れたということは......。 「島岡。お前がここに来た本当の理由はなんだ?」 「義一さん。Fグループを継いでいただけませんか?」 「島岡.....!」 「会長も、まだ後継者に悩んでいます。義一さんほどの人間がいないからです。いつかはと思いながら、 今まで決められなかった。でも、さすがに、もう限界で......」 「ぼくは、それがいいと思う」 「託生?!」 トレイに乗せたコーヒーを島岡とオレの前に置き、託生がオレに向き直る。 「側にいたらわかるよ。ギイ、ニュースや新聞見てるとき、歯がゆそうな顔してる」 「そんなこと......」 この失業者が溢れる不況の中。これ以上失業者を出さず、そして企業をどうやって生き残らせていく のか。空回りを止める一点がどこかにあるはずなのに、中核から外れて生きているただの高校生のオレには、その材料さえ与えられない。

託生の言うとおり、もどかしい思いでこの世界不況を見ていた。

しかし.....。

「島岡。オレは、長野一也として新しい人生を生きている。ゆくゆく普通にサラリーマンをして、託生と一緒に暮らしていきたいと思ってる」

せっかく時を越えて託生と巡り合えたのに、また日本とNYなんて真っ平ごめんだ。今度こそ、託生と添い遂げたい。Fグループの後継者なんて邪魔にしかならないんだ。

いつの間にか握り締めていた拳を、託生の手が包んだ。

「ギイ、昔、ぼくに言ったよね。バイオリンが染み付いてるって。だから、ぼくはバイオリニストの道に進んだんだ。同じように、ギイは経営者に向いていると思う」

「託生……」

「義一さんにしか、あのFグループを引っ張ることはできないんです。これは、会長の希望でもあります」 オレを確認した後、NYに戻っていたんだな。そして親父まで話が行ったのか。

しかし、仮にオレが了承したって問題がある。

「あのな。中身は崎義一でも、DNAは長野一也なんだぞ。どこの馬の骨ともわからない人間が、あのF グループを束ねるなんて幹部連中が許さないだろ?」

「ですから、あと十年。会長が引っ張ります。いえ、貴方が認められるまで、全力でバックアップします」 「島岡.....」

必死の形相で、島岡が言葉を重ねる。

オレが崎義一であったとき、生まれた瞬間から引かれたレールの上を歩いていた。だからと言って不満があったわけじゃない。むしろ、それにやりがいを感じていた。何万人という従業員や家族の生活がオレの肩にかかっていようが、それこそが励みになっていた。

「それと、義一さん。後継者云々は別にして、会長がぜひ一度会いたいとおっしゃっています。お母様も 絵利子さんも」

「.......あの現実主義の集まりのような人間が、信じてるのかよ?生まれ変わりなんて作り話みたいなことを」

「えぇ、信じてます。本当に喜んでおられました。一度、こちらに戻っていただけませんか?」

戻る.....?

「ギイ、ぼくも行くから」

「託生?」

「ぼくの後見人、ギイのお父さんなんだ」

「親父が?」

それは初めて聞いた。

「うん。ギイの代わりにって。あの子を愛してくれてありがとうって、そう言ってくれたんだよ。だから、ギイがNYに帰るなら、ぼくも拠点をNYに移すよ」

親父……。

親より先に逝くような最悪の親不孝をしたのに、オレの愛した人を認め、オレがするはずだったバックアップを名乗り出てくれていたのか。

胸の奥が熱くなる。長野の家族、崎の家族。オレは、どれだけ愛されていたのか。

「わかったよ、島岡。会うよ」

親父も六十に手が届いているはずだ。今、会わなければ、たぶんオレは後悔する。

オレの言葉に、島岡は胸を撫で下ろし、託生は目を細めて笑っていた。

「託生、用意できたか?」

「うん!」

文字通り空になったマンションの鍵を閉め、スーツケースを引き寄せた。

数日前、卒業式を終え、オレと託生はこれから成田空港へ向かうところだ。

一階まで下りマンションを出ると、風に乗ってほのかに柔らかな香りが漂ってきた。

「沈丁花だったっけ?」

「あぁ」

「もうすぐ春が来るんだね」

「そうだな」

結局、オレは高校卒業後、崎の家に戻ることになった。

島岡が訪ねてきて以来、長期休暇のたびにNYに戻り昔のように親父の仕事を手伝い、しかし、昔と違って仕事が入っていないときには託生がNYまで来てくれたおかげで、それほど寂しい思いはしていなかった。

崎の親父との養子縁組も手続き中である。

親父が基本他人のオレを後継者に選んだ前例があるので、オレが子供を作らず他人の誰を後継者に選ぼうと文句はないだろう。それは、託生との生活を邪魔されないことにも繋がる。

「今度こそ、二人で生きていこうな」

「.....約束だからね、ギイ」

お互いの左手には誓いの指輪。

時を越え、空間を越え、オレ達は何度でも巡りあい、そして、愛し合う。

「ある意味、死にネタ」で「ある意味、ハッピーエンド」の夢でございました。

夢で映画のように見たのを文章化したものです。

ですが、やはり死にネタには違いがないので、自分のポリシーがぁぁぁと思いつつ、頭から出ていってくれず、書いて追い出しちゃえと書いてしまいました。

私が死にネタ書きゃ、結局はこうなるという、典型みたいなもんです;

(2011.8.24)

## 奥付

# 沈丁花の香りが包み込む時

りか

URL http://greem.shop-pure.net MAIL greenhouse@shop-pure.net